Meisei University

近代日本文學に表れた家庭像

和田正美※

序

文學者にとつて家庭とは何かといふ問ひ掛けから始めることにしたい。

家庭はいふまでもなく一つの秩序であるが、その背後には、それを支へるものとして、同時代の社會の、或は世俗の秩序がある。社會と世俗は言葉の響きからしても嚴密に言へば別物であるが、文學者の意識の中でこの二つがとかく同一視されがちなことは爭はれない事實であらう。そして文學と社會或は世俗の關係はどんな場合にも微妙なそれである。

少なくとも現代の文學者は自らを社會の一員として、更に世俗の一部として認識する地點から仕事に取りかかる筈であるが、一方、彼の中には、良きにつけ悪しきにつけ、社會と世俗に敵對したがる抜き難い性向があるとも言はなければならない。「良きにつけ悪しきにつけ」と書いたのは、このことに文學の本質的な機能が存してゐると考へられる一方、文學者の心すべき陥穽が潜んでゐるやうにも思はれるからである。文學者が自らの内なる高次の秩序感覺に照して、現存の秩序に虚僞を感じ、それに背を向けた場合、私たちは文學といふものを承認する限り、それに異を唱へる根據を持たない。しかしそのあたりのことを曖昧にして、單なる氣取り、ポーズとしての反社會や反俗に文學者が赴くやうな場合には、それを批判して然るべきであらう。

近代日本文學の中に少なからず認められる反社會的傾向、或は反俗的傾向が一まとめにされて秤に掛けられたら、重心はそのいづれに傾くであらうか。

話を本筋に戻すと、文學者は社會と世俗につながつて、文學の糧をそこに仰ぎながらも、尚、それを容易に同化すべからざる異物と見做したがるが、彼等もその多くは結婚して家庭を持つ。文學者はかうして家庭の秩序に組込まれるが、最初に指摘した通り、その向う側には社會の、或は世俗の秩序がそそり立つてゐるのだ。

文學者が想念の領域で、いや、事と次第によつては行動の領域で、社會に對して、或は世俗に對してどんな態度を執らうと、兩者の中間に位する家庭の現實は日がな一日、彼を追ひ掛けまはして止まない。どれほど反社會的、反俗的な傾向を持つ文學者の作品にも、彼の直面した家庭の姿が影を落してゐようと考へられる所以である。

ここまでは文學者の意識をめぐつて書いたので、社會といふ言葉にそれの同意語とは言へない世俗といふ言葉を重ね合せなければならなかつたが、今度は見方を大きく變へて、「社會」から、「世俗」の有す

近代日本文學に表れた家庭像　和田正美　＊　言語文化学科　日欧近代文学

NII-Electronic Library Service

る否定的なニュアンスを取り去つて書くことにする。次に記すのは文學を越えた事柄であり、多分誰でも賛成してくれるであらうが、古今東西、如何なる社會もその最小構成單位は家庭であり、從つて社會の活力とその中の諸々の家庭の活力は互に原因結果の關係にある。家庭はそれが所屬する社會から大きく影響されずにはおかないし、その逆もまた眞であると言へよう。

國家は社會が執る形態の一つであるが、その國家について考へる際にも私達はかういふことに留意した方がいいやうに思ふ。國家のよしあしはたとへばその對外政策が帝國主義的であるか平和主義的であるかといふことによつて決められはしない。帝國主義國家といへどもその基底をなす家庭がきちんとしてゐれば健全であるし、平和主義の國家も家庭が歪んでゐれば不健全である。

他のあらゆる職業の人々と同じく文學者も社會の中で棲息してゐる。その意味で文學者は社會的な存在である。繰返し述べるとこの場合の「社會」に世俗といふ概念を滑り込ませる必要はない。そして當然のことながら家庭は個人的なものでもあれば、社會といふ名の全體に通じてもゐるのである。

たしかに家庭の現實は卑俗であり、平板であり、文學者の織りなす夢の激しさ、純粋さの前には一見價値も力もないものの如くであるが、それなら文學者はその夢だけを守つて、脚下の卑俗で平板な現實を平然と見下してゐられるだらうか。家庭を持たない文學者においてすら、彼の仕事が行はれる場所は象牙の塔ではあり得ない。家庭が明るいのか暗いのか、落着いてゐるのかゐないのかといつたやうなことは文學者の意識に隠微な形で働き掛けて、時には彼の死命を制することさへあると考へるのが至當であらうと思はれる。かう書いたからといつて作品に作者の生活がそのまま反映するといふ意味でないことはわざわざことわるまでもないだらう。

近代日本文學史を一瞥すると、そこには家庭の在り方を正面から問はうとした作品がきはめて少ないことに氣付かされる。「きはめて少ない」といふのは或る視點よりの評言であり、視點をずらせば、さういふ作品は皆無であると言へるかも知れない。このことを以て私達の文學の弱點の一つとする見解に私は敢へて反對しないが、それを言ふのなら（再びその異同が紛らはしい二語を使はなければならないが）社會の、或は世俗の僞善を抉り出して止まない作品にしても事情は同じである。私はこの文の中で、「近代日本文學の中に少なからず認められる反社會的傾向、或は反俗的傾向」と書いたが、それはさういふ「傾向」の存在を指摘したまでであり、それが何等かの作品に申し分なく結實したと考へてゐるわけではない。實際、世人を震憾させる反俗、反社會の名作は未だ現れてゐないといふべきだらう。明治以來の文學は作品の夥しい量とそこで費された情熱の強さにもかかはらず、何か中途半端であり、不徹底である。どうしてかうなつたのであらうか。

事柄を文學者の才能の乏しさと志の低さに歸せしめることは私には到底出來ない。才能は發揮され、志は生かされる地盤を必要とする。社會の側にその地盤が不足してゐたのだと決めつけるのは、さも文學者の責任を不問に付するかの如くであるが、さういふことではなく、文學者の側に責任がなかつたわけではなからうと思做した上で、百數十年の日本社會の特殊な性格に注意することにしよう。

この社會は定着することを知らず、自らその中の様々の營みをも定

Meisei University

着させまいとしてゐるかのやうに見える。戦前の日本は幾つかの點で戦後の日本より格段すぐれてゐたが、この點に關する限り、戦前も戦後も似たやうなものである。そこには堅牢な形といふものがない。文學の不充分な性格は社會のさういふ不充分な性格に相應し、それに隨伴したのではなかつただらうか。

しかしないものねだりはこの位にして、文學の現實に眼を落すと、そのあちこちに、私達の見聞きしたり、經驗したりする家庭の姿が見出だされる。個々の作品に即してそれを檢證して見たいのであるが、作品を、それに固有の性格を無視して、「文學に表れた家庭像」といふテーマに仕へさせようともくろんでゐるのではない。私達の家庭の變遷が文學作品を通して過不足なく辿れると思ひ込んでゐるのでもない。私の試みは家庭像に焦點を合せて、或はそれにこと寄せて近代日本文學を讀み直すことであり、以下、一箇の限定的な文學論のつもりで書くことにする。

一　田山花袋『蒲團』

1

最初に取上げる作品は田山花袋の『蒲團』であるが、讀者はそのことに奇異の念を懷くかも知れない。『蒲團』は家庭小説ではない。（家庭小説といふ言葉は輕くて、無節操な感じでいやであるが、一先づこれを、「家庭を題材にして、そのあり方を描かうとした小説」といふ位の意味で使つておく。）明治四十年發表の『蒲團』は、周知の通り、生活に倦み疲れた中年作家が若くて美しい女弟子に戀をしながら、彼女に戀人が出來たことなどもあつてその戀を叶へられず、彼女が父親に連れられて郷里に歸つた後、それまで彼女の寢てゐた蒲團に顏を埋めて泣くといふ自己曝露の作品であり、これを戀愛小説と見做すこともためらはれるが、未だしもこの方が家庭小説といふ稱呼よりは眞實を衝いてゐると言へよう。

しかし注目に値するのは、『蒲團』の主人公・竹中時雄の戀を成立たせる場が彼の家庭に他ならないことである。ヒロインの横山芳子は最初、時雄の家に下宿し、作の途中で彼の義姉の家に預けられるが、もとより義姉の家は赤の他人の家ではないし、しかも彼女はその後、時雄の意志で彼の家に戻る。かう見て來ると時雄の戀は常に彼の妻の眼が届くところを動いてゐることになり、從つてそれは彼と妻の關係を抜きにしては語れないのである。

話は變るが世に『蒲團』ほど憐れな小説はないやうな氣がする。これはどんな文學史もそのために頁を割くほど有名であるといふのに、發表當時はともかく、後世の評家はほとんど誰一人としてよく言はない作品である。現代では『蒲團』はその文學史的功罪だけを問題にされ、作品それ自體としては、評家の中に專ら否定的熱情を掻き立ててゐるやうに見える。妻子のある中年男が若い女に戀をしていけない筈はないし、その戀がうまく行かなかつた經緯を小説に書いて惡い筈もあるまいと思はれるのに、どうして『蒲團』はこれほど不評なのであらうか。

その理由を私なりに忖度すると、それはこの小説の主人公の態度が戀にしろ、精神的煩悶にしろ、俗世間との對決にしろ、西洋文學の素養にしろ、紛ひ物と言ひたくなるほどいかがはしいことであると思ふ。贔屓目に見たところで、それらはどれも、せいぜい二流、三流の

NII-Electronic Library Service

Meisei University

代物でしかない。そして主人公は（少なくとも作者の意識の中では）作者に等身大的に密着する人物であるのだから、結局、いかがはしい態度の持主は花袋その人であることになつてしまふ。

　もつとも花袋の態度といふことでは、前代未聞の小説を書いて文壇的に成功したいと考へた、その意氣込みだけは本物であらう。後年の花袋は『蒲團』執筆當時のことを顧みて、日露戰爭後の活氣を帯びた社會における活氣を帯びた文壇で僚友の島崎藤村と國木田獨歩がそれぞれ新時代の機運に應へ得る仕事をするのを目のあたりにした時、

> 私は一人取残されたやうな氣がした。戰爭には行つて來たが、作としてまだ何もしてゐない。（中略）かう思つて絶えず路を歩いてゐても、何も書けない。私は半ば失望し、半ば焦燥した。

と感じたことを記し、そこへ「新小説」から執筆依頼があつたので、

> 私は今度こそ全力を擧げなければならないと思つた。社〔引用者註。當時花袋が勤めてゐた博文館のこと〕へ往復の途中、新たに開けた郊外の泥濘深い路を、長靴か何かで、いかに深く製作のことに就いて頭を惱したであらう。あれでもない、これでもない。かういふ風に考へては打消し、打消しては考へた。[1]

　ここに見られる野心、すなはち時流におくれまいとする野心を世俗的としてしりぞけることは正しくないであらう。たしかにそれは世俗的なのであるが、高尚な精神や深遠な思想といへども、それを世間に認知させるためには世俗的な手續きを必要とするからである。

　しかしいふまでもないことながらその野心の結果として生れた作品の價値如何は問題の性質を異にする。

　評家はそれぞれの氣質と文學觀に從つて『蒲團』の弱點をさまざまにあげつらつてゐるが、私見によれば、この作品で致命的なのは、主人公が、或は作者が主人公において再現をもくろんだ彼自身が、讀者の共感を誘ひもしなければ反撥を招きもしないことである。少なくとも私にとつて竹中時雄は魅力のない男でしかない。

　しかしこの魅力のない男を主人公にした魅力のない小説は評家があまり注意したがらないところで、そして作者が夢にも思はなかつただらうところで、或る逆説的な魅力を以て私に迫つて來る。この小論の眼目はそれを指摘することにある。

　が、その前に、『蒲團』といふ作品の全體から受ける印象にもう少し言葉を費すことを許して頂きたい。

2

『蒲團』の戀はこれが戀と言へるのだらうかと思はずにはゐられないほど消極的なそれである。

　作者は主人公がこの「戀」にめぐり合ふまでの状況を次のやうに書いてゐる。

> 今より三年前、三人目の子が細君の腹に出來て、新婚の快樂などはとうに覺め盡した頃であつた。世の中の忙しい事業も意味がなく、一生作（ライフワーク）に力を盡す勇氣もなく、日常の生活――朝起きて、出

NII-Electronic Library Service

Meisei University

> 勤して、午後四時に歸つて來て、同じやうに細君の顔を見て、飯を食つて眠るといふ單調なる生活につく〴〵倦き果てて了つた。（中略）道を歩いて常に見る若い美しい女、出來るならば新しい戀を爲たいと痛切に思つた。(2)

そこへ竹中時雄こと田山花袋の高風を慕ふ文學少女が岡山縣から上京して來て、彼の家庭の一員になり、「時雄の孤獨なる生活はこれによつて破られた」(3)のであるが、これでわかるやうに時雄はその戀の相手から何かを貰はうとしてゐるだけであり、戀において他に何かを及ぼさうとしてゐるのではない。彼の「單調なる生活」「孤獨なる生活」は破られたやうに見えても、實は破られてゐないのだ。

それればかりではない。右の一節は彼の戀の相手が「若い美しい女」でありさへすれば誰でもよいことを感じさせないであらうか。時雄が芳子にどれほど熱中しても、そこには、彼女でなければ彼の中の空洞を埋められないといつた趣きがない。どう見てもこの戀には相手を選ばない、アノニマスなところがある。

中村光夫は『蒲團』を評して、「この小説を讀む者の誰しもすぐ氣付くのは、主人公の愛慕の身振りが年甲斐もなく大袈裟なのに比して、その情熱の内容が案外稀薄なことである」、「敢て判つきりと云ひ切れば、『蒲團』の主人公は戀愛してゐるのではなく、むしろ或る借り物の戀愛の觀念に陶醉してゐるだけである」(4)と述べた。

時雄にしろ、彼の生みの親である花袋にしろ、ありもしない戀心を強ひてあるかのやうに思做したわけではなかつただらうから、この評言は一見酷であるが、しかし「戀愛の觀念」が肝腎の戀愛を壓してゐることは殘念ながら認めざるを得ない。

『蒲團』發表の當時にも中村星湖は作中の、「芳子はかれの爲めに平凡なる生活の花でもありまた糧でもあつた。（引用者、中略）であるのに、再び寂寞荒涼たる以前の平凡なる生活にかへらねばならぬとは」云々といふ箇所を問題にして、「これでは、理想や趣味の同じい婦人を戀したのではなくて、ただの愛らしい、いやハイカラの『少女』を戀したに過ぎぬ、眼の戀、肉の戀に過ぎぬ」(5)といふ鋭い批評を下してゐる。「眼の戀、肉の戀に過ぎぬ」といふのは心の戀ではないといふ意味だらう。

二人の中村は『蒲團』の戀の案外な表面性、抽象性を指摘したことになる。私はこれに受動的とも云ひたいほどの消極性を付加へておかうと思ふ。

中年の戀は見方によれば文學の材料として青年の戀よりもつと有力であり、適切なやり方で描かれれば、その美しさと醜さによつて、また青年にはおほむね免除されてゐる内外の闘ひの苦しさによつて、青年讀者にすら多くを與へることが出來るであらうに、『蒲團』はその點では明らかに失敗してゐる。それは主人公が見かけに反して中年の戀を、もしくは年齢に制約されない戀そのものを決して主體的には生きてゐないからである。何よりもよくないのは彼がその戀の實現を心底では信じてゐないことである。それならきつぱり「忍ぶ戀」で通すのかといへば、その覺悟もない。戀の實現を信じなければ、それを阻まうとする外的な力がその重量を以て姿を現すこともないだらう。「機會に遭遇しさへすれば、其の底の底の暴風は忽ち勢を得て、妻子も世間も道徳も師弟の關係も一擧にして破れて了ふであらうと思はれた」(6)と時雄は言ふが、それは彼の妄想に基く願望であり、實際には、

NII-Electronic Library Service

「妻子も世間も道徳も師弟の關係も」彼の自家中毒の煩悶とそれに由來する狂態を苦笑ひしながら見守つてゐるだけなのである。

　右の引用文の中の「其の底の底の暴風」は時雄と芳子が相思相愛の一歩手前の狀態にあることを前提にした表現であるが、これも彼の錯覺であり、彼女はいついかなる時にも彼に戀してもゐなければ、彼に戀されてゐることに氣付いてもゐない。それだからこそ芳子は戀人が出來た時、時雄にその戀の保護者たることを依頼したのである。時雄はその消極性、受動性の赴くところとして、彼の戀心を何等かの方法で女に傳へるといふ、戀の禮儀――それは戀してゐる女への禮儀である以前に、戀をしてゐる自分自身への禮儀である――にすら顧慮しなかつた。

　芳子とその戀人の關係をめぐる主人公の態度について言へば、彼は彼等の「戀の温情なる保護者」としての役割を引受けるが、作中の或る箇所で、それは「芳子の歡心を得る爲に取つた」措置なのだと説明されてゐる。『蒲團』の讀者は誰しもこの説明に接して啞然とするであらうが、これも彼の戀の消極的、受動的な性格の一證左であり、彼が意識の表面で何を考へようと、この戀はそれによつて生活を破らうとする筋合のものではなく、彼の生活に色彩を添へるものでしかないといふべきである。

　『蒲團』はその主人公が一箇の獨立した精神の持主としてその中を動いてゐるといふ印象を與へない作品である。時雄の姿には人間の善にも惡にも道を通じてゐるといつた趣がない。讀者は白け、時には笑ひ出す。『主人公の立ち場に對して十分に讀者の同感を誘ふほどの力がない。主人公の所爲が是であらうと非であらうと、有無をいはせず同感させてしまふほどの力が足らぬ」[7]といふ片上天弦の不滿は私の不滿でもある。

　『蒲團』が發表されてから今日に至るまでの八十數年間にこの作品への批判はほとんど出つくした觀があるから、私がその上更に何か言ふのは屋上屋を架すの譏りを免れないかも知れないが、それを承知の上で右のやうな批判を試みたのは、この作品の弱點がそれ以後の文學の或る好ましくない傾向を代表してゐるやうに感じたからである。

　『蒲團』の主人公には人間の善と惡に道を通じてゐるところがないと私は書いたが、私達の文學を全般的に見ると、そこには善のエネルギーも惡のエネルギーも不足してゐるのではないだらうか。『蒲團』をその始祖にするとよく言はれる私小説系統の作品において、その傾向は特に著しいと思ふ。

　私達の日常生活がどれほど平凡であらうとその中には善と惡が潜在してゐると言へよう。さうだとすればその善なり惡なりを顯在化させて、それを小説の登場人物に所有させることが可能な筈である。そんなことをすると小説の中の人物は現實の人間から離れて、グロテスクな觀念の塊になりはしないかといふ反論に對してはドストエフスキイの場合を例に擧げて應じることにしたい。ドストエフスキイの登場人物達は善惡の極限を生きてゐるやうに見えるが、彼等は我が國の小説に現れがちな、毒にも藥にもならない連中より遙かに人間的なのである。

　善は一先づ措くとして、『蒲團』に惡の要素は含まれてゐるだらうか。主人公は或る箇所で自らを顧みて、「其の身の不當の嫉妬、不正の戀情」（傍點、引用者）といふ、作品の構成にひびを入らせるやうな言ひ方をしてゐるが、假に彼の嫉妬を不當であり、彼の戀情を不正

Meisei University

であると認めたとしても、それらの惡は彼の頭の中で弄ばれてゐるに過ぎない。

花袋は『蒲團』を執筆するに際して、「かくして置いたもの、壅蔽して置いたもの、それと打明けては自己の精神も破壞されるかと思はれるやうなもの、さういふものをも開いて出して見ようと思つた」[8]さうであるが、このやうに自らの行状を思ひ切つて世人の眼に曝す冒險は、そこにまつはりついてゐる惡が所詮頭の中の惡であり、從つてそれは世俗を深く傷つけるものではないといふ暗々裡の自覺に基いてゐただらうと思はれる。

3

『蒲團』の主人公の竹中時雄は全く駄目な男であり、彼の「意中の人」たる横山芳子も類型の域を出てゐないが、そこへ行くと、芳子の戀人と彼女の父親はそれなりに描けてゐると思ふ。處女の肉體を所有した自信から年長者の如何なる説諭にも耳を傾けずにふてぶてしく居直る田中秀夫。その田中と芳子の肉體關係を逸早く見抜いたリアリストの父親。『蒲團』ではこのやうに主役より脇役の方が生き々々としてゐるが、私達はここで、これらの脇役よりもつと脇役である、主人公の妻に眼を向けなければならない。

彼女は夫を頼つて上京した芳子を我が家の一員とすることを厭はず、一旦彼女（妻）の姉の家に去つた芳子を夫の命令に從つて再び迎へ入れた人である。明治時代の主婦においてこの種の寛容さはさほど珍しくなかつたのかも知れないが、それでも、或はそれ故に、このことは『蒲團』の構成を考へる上で重要である。

最初に指摘した通り、この作品は家庭小説とは言へないにしても、主人公の戀にしろ、他の何にしろ、それらは彼の妻が萬事の切り盛りをする家庭を中心にして展開して行くのである。

主人公と妻の關係及び彼女に對する彼の態度が考察されなければならない。

『蒲團』評は（私自身前章でさうしたやうに）主人公の戀の性格とその背後にある作者の精神だけをその内實としがちであるが、この作品が發表された頃の論調の中には、それが論の中核ではないにもせよ、妻の描き方を不滿とするものが幾つか見出だされる。

> 折角作の中心動機たるべき家庭の狀態または妻に對する主人公の心的狀態の現れ方の足りない事が作として最大欠點であらう。約言すれば妻と主人公との關係が今少し明確でありたかつた。[9]（相馬御風）

> 最も不滿足なのは、妻君の描寫である。柔順一方の人物とはしてあるが、それすら作者は面倒くさいとでも思はれてか、碌々書かなかつた氣味ではないか。出てゐる細君はほんの筋を通す道具たるに過ぎぬ。殊に三人の子供もあるといへば、家庭の他の半面が今少し濃く影を主人公の心に投げかけるべきであらう。[10]（島村抱月）

御風も抱月も『蒲團』を支持した論客であり、それだけに尚、彼等にこの言があることは興味深い。二人とも『蒲團』を近代精神が生み出した近代的作品として認めながら、しかしそれにしては家庭の中の

NII-Electronic Library Service

Meisei University

主人公の姿に近代的とは言へないところがあるのではないかといふ疑ひにとらはれたことが想像される。

さて主人公は妻をどう見て、彼女とどのやうにかかはつたのか。

八年前には熱烈に戀して何とか自分の妻にしたいと願つた桃割姿の娘は時勢の進展につれてすつかり舊弊な女になつてしまひ、彼は彼女に今では不滿しか感じないのだと打明けてゐる。

> 其の身が骨を折つて書いた小説を讀まうでもなく、夫の苦悶煩悶には全く風馬牛で、子供さへ滿足に育てれば好いといふ自分の細君に對すると、何うしても孤獨を叫ばざるを得なかつた。「寂しき人々」のヨハンネスと共に、家妻といふものの無意味を感ぜずには居られなかつた。[11]

> 妻と子――家庭の快樂だと人は言ふが、それに何の意味がある。子供の爲めに生存して居る妻は生存の意味があらうが、妻を子に奪はれ、子を妻に奪はれた夫は何うして寂寞たらざるを得るか。[12]

『隨分底の淺い不滿ですね』といふ聲が、世の中に決して少ないとはいへないところの、妻故に苦しむ男の口から發せられさうであるが、とはいへ當人にして見れば誰が何と言はうと不滿は不滿なのだから、私達は一應その不滿を認めて、主人公が妻にそれをどんな風にぶつけたか知りたくなる。しかし主人公は妻に向つて、『たまには俺の小説を讀んでくれ』と頼むわけでもなければ、『家妻なんか無意味だから出て行つてくれ』と言ふわけでもない。夫と妻の遣取りには常に女弟子の影が差してゐる。抱月が指摘した通り、「二人の子供もある」「家庭の他の半面」は閑却されてゐるのである。

次に記すのは芳子の戀人が彼女の後を追つて上京したことを知つた時雄が酒で憂さを晴らさうとする場面の描寫である。酌は彼の妻がしてゐる。

> 時雄は頻りに酒を呷（あふ）つた。酒でなければこの鬱を遣るに堪へぬといはぬばかりに。三本目に、妻は心配して、
> 「此の頃は何うか爲ましたね。」
> 「何故？」
> 「醉つてばかり居るぢやありませんか。」
> 「醉ふといふことが何うかしたのか」
> 「さうでせう、何か氣に懸ることがあるからでせう。芳子さんのことなどは何うでも好いぢやありませんか。」
> 「馬鹿！」
> と時雄は一喝した。[13]

そして東京に居据つた田中と芳子の間柄がますます親密になつて行くのを防げない時雄は、

> 二人の戀の温かさを見る度に、胸を燃して、罪もない細君に當り散らして酒を飲んだ。晩餐の菜が氣に入らぬと云つて、御膳を蹴飛ばした。[14]

主人公のかういふ態度、妻に對して暴君ともサディストとも言へるこの態度を大抵の讀者は何氣なく讀み過すであらうが、私の見るとこ

NII-Electronic Library Service

Meisei University

ろ、これは『蒲團』といふ小説の性格を或る面から規定するだけでなく、それを越えた何物かを暗示しさへする重大な事柄である。ここから二つのことが容易に看て取れると思ふ。

一つは主人公が妻に對してその戀を、さすがに公言はしないまでも、ことさら隠さうともしてゐないことである。これは現代人の常識に反した振舞であらう。浮氣は女房に内緒でするものではないか。花袋がこの言葉を聞いたら、激怒して、『俺がやらうとしたのは浮氣ではなく靈肉一致の戀愛なのだ』と言返すかも知れないが、それなら尚更のことである。妻にとつて夫に高尚な戀愛とやらをされるのは女遊びをされるのより、もつと辛い筈だからである。

しかし主人公の一見非常識な、無神經な態度は、次のことを考へ合せると、それを理解するのが困難といふことにはならない。

彼は、『俺のすることに文句は言はせない』といふ高みから家人に接してゐるのである。妻は夫に從屬せしめられてゐる。さうでなければいくら戀が滿されないからといつて妻に酌をさせて酒を呷つたり、御膳を蹴飛ばしたりすることが出來るものか。

主人公が女弟子のことで妻に全く抵抗されなかつたわけではなく、作中に一箇所だけ、その抵抗の消息を傳へる文がある。芳子が彼の家に寄寓するやうになつてから、時雄はすつかり生氣を取戻すが、しかしその内、彼は次のやうな事態に直面しなければならなかつたといふ。

> 一月ならずして時雄はこの愛すべき女弟子を其の家に置くことの不可能なのを覺つた。從順なる家妻は敢て其の事に不服をも唱へず、それらしい様子も見せなかつたが、しかも其の氣色（きしよく）は次第に惡くなつた。限りなき笑聲の中に限りなき不安の情が充ち渡つた。妻の里方の親戚間などには現に一問題として講究されつゝあることを知つた。[15]

そこで主人公は止むなく芳子を義姉の家に預けるのだが、自らの權限において彼女を連れ戻すことに決めた時、妻がそれに反對しなかつたことはすでに述べた通りである。

その後、「細君も芳子に戀人があるのを知つてから、危險の念、不安の念を全く去つた」[16]のださうである。夫の感情が若くて美しい女弟子に傾いてゐたのを妻が悟らなかつたわけでないことはこの文からも知れるであらう。

『蒲團』の主人公の在り方をひとことに要約すれば、彼は封建的家長なのである。（封建的家長としては墮落した部類に属すると思ふが、その問題は問はないことにする。）そしてここが最も重要なところであるが、妻は封建的家長としての夫を受入れてゐるのである。

主人公の時雄は近代的であることを自負し、弟子の芳子を近代的な女に仕立てようと努め、妻に象られる前近代を、「お前達のやうな舊式の人間には」云々として輕蔑してゐるが、その實、彼の生活は前近代の中で營まれてゐる。彼は精神面でどれほど「近代的」な煩悶に苦しめられようと、生活面では近代の酷薄さに少しもおびやかされてゐない。自らを不幸と信ずる主人公とその生活の間の諧和は彼の主觀に反して未だ失はれてゐない。妻を見下しながら、その妻に自分ではさうと知らずに寄り掛つてゐる。これが『蒲團』における薄つぺらな戀の據つて立つ地盤である。

頭は近代であり、生活は前近代であること。文學者の花袋がこれに

NII-Electronic Library Service

Meisei University

氣付かなかつたことは彼のために惜しむべきであるが、一方、このことで花袋を責めるのは酷に過ぎるやうな氣もする。何故といつてこれは花袋と同時代の明治の知識人の（すべてとは言はないが）多くの人々の實態だつたらうと思はれるからである。

夫が封建的家長たることに安住し、妻がそれに協力するといふ關係は、この小説の主人公の憧れる「今様の細君」が増加するにつれて動搖を蒙らずにはゐなかつた。私達は『蒲團』以後の文學の歴史において、その關係が徐々に崩壊して行く眺めを見ることが出來るであらう。

二　森鷗外『半日』

1

田山花袋が明治四十年の『蒲團』に續いて四十一年に發表した『生』は『蒲團』と同じく作者の實體驗に取材した作品であり、その内容をごく簡略化して言へば、これは家の中で絶對的な權力を振ふ横暴な老母が息子達とその嫁達を苦しめる物語であるが、翌る四十二年に、恰もそれに對抗するかの如く、嫁が姑を苦しめるといふ内容の短篇小説が花袋の知己の文學者によつて發表された。森鷗外の『半日』がそれである。

文科大學教授文學博士高山峻藏の家庭は博士と奥さんと當年七歳の玉ちやんと博士の母君の四人暮しであるが、奥さんは母君を頭から受けつけず、その一擧一動を口汚く罵つて止まない。博士は母君と奥さんの間に挾まつて懊惱するがどうにもならない……。

鷗外の文壇復歸を記念する作品である『半日』において眞先きに氣にかかるのはこれが作者の生活を抜きにしては語れないことである。『半日』はそれを讀む者が作者の生活に目を向けざるを得ないやうに仕組まれてゐる。實際、この作品は作者の何人たるかを知らない讀者に對してすら、それが彼の生活の直接的反映であることを直觀させずにはゐないであらう。『半日』はさういふ作品なのである。近代文學の世界では生活の質が作品の質を決定するとよく言はれ、その觀點から作者の生活の在り方が吟味されがちであるが、『半日』の問題は明らかにそれとは違つてゐる。

その點、前章で取上げた『蒲團』は未だしも作者の生活を無視して讀むことが出來ると思ふ。『蒲團』がその結果においてはどうあれ、作者のもくろみとしては一點の虚僞をも交へない、事實そのものを寫した作品であるのに對して、『半日』には（たとへば同じ敷地の中で別居してゐる姑と妻が同居してゐることになつてゐたり、鷗外の先妻の子の存在が抹消されてゐたりするやうに）フィクションが含まれてゐることを思ふ時、これはいささか皮肉な現象と言はなければならない。

鷗外研究の分野でも、『半日』を作者の生活から獨立した作品として扱ふ論文に私は接したことがない。研究家は鷗外の日記その他の資料を手懸りにして、『半日』執筆當時の彼の家庭生活や社會生活を復元しようと努め、それとの關係においてこの作品に考察を加へてゐる。それは自然の勢といふものであらう。繰返して言へば『半日』はさういふ作品なのである。森鷗外を專門的に研究してゐるわけでない私は彼等の研究の成果を受入れざるを得ないのであるが、それでも時々、諸家の所論を前にしてゐると、この作品の基本的性格を承知し

NII-Electronic Library Service

Meisei University

てゐる筈なのに、「さうすると『半日』から作者の生活といふインデックスを取去つたら、その後には何が残るのだらう」といふ氣持に誘はれて行く。

しかし『半日』の印象は立派に一箇の作品である。これは單なる事實の記録ではない。如何にこの作品が作者の生活を呼吸してゐるとしても、である。

『半日』を掲載したのが木下杢太郎、北原白秋など氣鋭の青年文學者の主宰する雜誌「昴（スバル）」であつたことをここで參考にすべきかも知れない。鷗外はことによると『半日』を激情に驅られて書いたのかも知れないし、この假定が正しければ書き終へた後味は必ずしもよくなかつたであらうが、その場合にも、これはこれで私情を超えた作品になつてゐるといふ自信がせめて心の片隅にでもなければ、それを後進の手に渡して、彼等の期待を裏切るやうな眞似はしなかつただらうと思はれる。

『半日』の、右に述べたやうな意味での作品としての面目を私達は何處に求めたらよいのであらうか。

二

事柄の順序として『半日』執筆の動機を問はなければならない。鷗外は公私のけぢめにやかましい人であるにもかかはらず、何故、妻が姑を排斥し、さうすることによつて夫の自分を傷つけるといふ家庭内の出來事を小説に書いて天下に公表したのか。

讀者の誰にでもすぐわかるのは、不届きな妻に筆誅を加へて、うろたへさせ、以て彼女に態度を改めさせようとしたのだといふことである。筆誅といふ古めかしい言葉を持出したが、洋の東西を問はず、特定の個人に筆誅を加へることは幾度も行はれて來たとはいふものの、その相手として自分の妻を、それも別れた妻ならともかく現に同じ屋根の下で起居を共にしてゐる妻を選んだことは、多分、空前絶後であらう。

夫である博士の母君のことを「あの人」「あんな人」としか呼ばない奥さんは母君の「鋭い聲」（博士の言葉）を評して、「まあ、何といふ聲だらう」、「あんな聲の人があるでせうか」と決めつける。そればかりか母君の日常生活を次のやうに言つてのけて憚らない。

丸であなたの女房氣取で。會計もする。側にもゐる。御飯のお給仕をする。お湯を使ふ處を覗く。寐てゐる處を覗く。色氣違が。(1)

これだけ讀めば母君にも重大な落度があるやうに見えて來るが、博士にして見れば母君が「（博士の）お湯を使ふ處を覗く」のも、「（夫婦の）寐てゐる處を覗く」のも必要に迫られて、止むを得ず、さうするまでであり、それを「色氣違」の所爲として斷罪される謂はれはないのだつた。

ここには母と妻の間に引裂かれた男が日夜味はせられる地獄の苦しみがある。「舊式の丸髷、泥鴨（あひる）のやうな歩き振、温順と貞節とより他に何物をも有せぬ細君」といふのは『蒲團』の中の一句であるが、花袋が一蹴した「温順と貞節」こそ鷗外が妻に求めて得られない美質なのであつた。

鷗外は筆の力を藉りて、その地獄から脱け出さうとした。彼が『半日』を書いた最大の動機はこのことだつたらう。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

もしこの動機が壓倒的なそれであつたとしたら、鷗外はこれ以外には何も考へられなかつたであらうから、他の動機を求めるのは無駄といふことになるが、作家の創作心理は概して微妙複雑であり、讀むに堪へるほどの作品においては複數の動機が絡み合つてゐるものと考へられよう。

『半日』をこの觀點から一瞥すると、當時流行してゐた自然主義とこの作品の關係が浮び上る。この流派の觀念的、欺瞞的な性格は鷗外のつとに承知するところであつたらうが、彼の中には、その自然主義の向うを張るやうな作品を書いて見たいといふ欲求が萌してゐなかつたとは言へまい。そして彼はいはば敵の武器を奪ふ形で、自然主義とは異なりながら、しかも（言葉の矛盾をおそれずに言へば）自然主義よりもつと自然主義的である作品を『半日』において實現させた。實際、『半日』の現實曝露は『蒲團』や『生』のそれより——花袋ばかり引合ひに出すのは彼に對して幾分氣の毒であるが——ずつと徹底してゐるやうに思はれる。

『半日』執筆の動機をさぐつて、それを主動機と副次的な動機に分けて見たが、これがすべてだつたのであらうか。作者の彈劾の筆を支へたものはこれ以外にもあつたのではないかと思ふのであるが、その問題は後回しにして、以上二つの動機の成否をめぐつて所見を述べることにしよう。

妻の行狀を小説に書いて、彼女に反省を促すことは隨分思ひ切つた冒險であり、危險な賭でさへある。それは成功した場合にも問題を殘すが、失敗したら、何しろ鷗外は明治の出世社會で樞要な地位を占める人物だつたのだから、その結果は取返しのつかないものになつてゐただらう。そもそも『半日』のおかげで傷つくのは作者とその妻だけではない。妻の實家もいい迷惑をしただらうし、作中の博士から賢母、賢夫人として讃へられた母君にしたところで、世間から、『あの人が……』といふ好奇の眼で見られることは避け難いのである。

『半日』とそれに續く『一夜』といふ小説（これは作者が妻の願ひを容れて破棄したので現存してゐない）の壓力に耐へ兼ねて、妻が姑に「屈服」した時の樣子を鷗外の先妻の子の森於菟は次のやうに傳へてゐる。文中の「母」は勿論、於菟から見れば繼母に當る人を指してゐる。

> その頃一度夜おそく父が母をつれて祖母の室へ來て、母が祖母の前に手をつき頭をさげた事があつた。その時母の眼は涙で一ぱいであつたが決して祖母に心服したのではないことは明かであつた。その感情はこんな形式的なことではどうしようもないものであつたのである。しかしその後時と共に事情がよくなつたことも事實である。(2)

「時と共に事情がよくなつた」のであるからには、私が『半日』の第一の動機と見做したものにおいて、鷗外は所期の成果を擧げたことになる。疑ひもなくそれは結構なことだつた。しかしこれが狀況的な成功であり、問題の根本的な解決になり得てゐないことも右の引用文から明らかであらう。事實、家庭生活における鷗外の餓ゑ、渇きは終生いやされることがなかつた。

それでは『半日』を以て自然主義に對抗したいとする第二の動機についてはどんなことが言へるか。

山崎國紀は『半日』が自然主義的作品に見えない理由の一つは、

NII-Electronic Library Service

Meisei University

「鷗外自身のもつ高度な教養性から滲出する獨特な雰圍氣にある。これは鷗外の内部に肉體化されたもので無意識に滲出される傾向のものである」[3]と述べた上で、更に、鷗外がこの作品に非自然主義的装置を施したことを指摘し、その「装置」として最初に「言辭の工夫」「言辭の巧妙な使用」を擧げてゐる。

博士、母君、奥さん、玉ちゃんといふやうなユーモラスな呼稱。

「奥さんは嫌な事はなさらぬ。いかなる場合にもなさらぬ」といふやうな、妙な敬語の混用。

山崎は續けて（これは言辭の場合ほど自然主義に對置させてはゐないやうであるが）竹森天雄と共に、『半日』に戯曲的性格を看て取り、「あの獨特な『半日』の言辭も、この戯曲的性格の一環として考えるべきではなかろうか」[4]と結論づけてゐる。

これらの指摘はたしかにその通りなのであるが、私見によれば、敢へて「非自然主義的装置」と言はなければならないほど大袈裟なものではない。いや、さういふ装置が施されてゐないと言ひたいのではなく、鷗外はそれを施すことに格別の努力を要しなかつたらうといふ意味である。

『半日』の戯曲的性格といふことでは、その頃の鷗外の主要な關心が、そのほとんどは飜譯であるところの戯曲に向けられてゐたことを山崎自身、認めてゐる。「しかし、戯曲的手法が、當時の鷗外にとつて自然なものであつたとしても、『半日』には、かなり意識的に適用されたように思える」[5]（傍點、原文）と山崎は言ふが、私はこの文の歸結部分よりも前提部分に惹かれる氣持を抑へることが出來ない。

言辭の問題にしても話は割合單純である。西洋文學の骨法を體得した人間が『半日』のやうな題材に臨む場合には、その中に自分自身が含まれてゐるのなら尚更、諧謔的手法がきはめて有力であることにごく自然に想到するといふものであらう。

數ある『半日』論の中から特に山崎のそれを選び出したのは彼の主張を批判したいからといふよりも、むしろ、鷗外のやうな作家を論ずる際には西洋文學の常識を援用する方がよろしからうと考へたからに他ならない。

『半日』と自然主義の關係で私の氣に懸るのは、右のやうなことではなく、作者が自然主義を多かれ少なかれ意識しながらこれを書いたといふ假説が正しいとすれば、この作品には自然主義の狀況性に殉ずるおそれがありはしなかつたかといふことである。鷗外の明敏な洞察は自然主義がいづれ倒れることを見抜いてゐたに違ひないが、それでも尚、その自然主義を敵に回して書くことをしたりすると（何しろ『半日』は一見自然主義的な作品なのだから）いつの日にかこれが自然主義の諸作と一括されて、過去の世界に放りこまれることになるかも知れないといふものであらう。

しかし『半日』はその動機において狀況の産物であつたにもかかはらず、一過的な狀況を越えた何かを訴へ掛けてゐる。次にその何かの内實を明らかにしなければならない。

三

『半日』を讀み返す度に氣になる一節がある。

お父様が生きて入らつしやつて、おれの兄弟が内にゐた頃の事を考へて見ると、内ぢゆうで誰も死んだらどうの、金がどうのとい

NII-Electronic Library Service

Meisei University

ふやうな事を考へてゐたものはないのだ。年寄は年の寄るのを忘れて、子供の事を思つてゐる。子供は勉強して、親を喜ばせるのを樂にしてゐる。金も何もありやあしない。心と腕とが財産なのだ。それで内ぢゆう揃つて、奮闘的生活をしてゐたのだ。その時は希望の光が家に滿ちてゐて、親子兄弟が顔を合せれば笑聲が起つたものだ。(6)

この後、博士は玉ちやんを抱きしめて、「玉なんぞは親の笑ふ聲を知らないのだ」と付け加へる。

これは奥さんが母君への嫌惡感を軸にして財産や遺言のことで博士を責め立てるのを受けて、博士が奥さんをたしなめる箇所に出て來る言葉であり、私達は『半日』時代の森家の中で夫が妻にこの種の言葉を實際にぶつけただらうと想像して差支へないが、一方、この言葉はさういふ文脈から切離しても立派に通用するのではないだらうか。鷗外のことを何も知らない人にこの文を讀ませた時、彼が正常な感覺の持主でさへあれば、ここに或る深いものを感じる筈である。博士の言葉は作品の中の前後關係に過不足なくつながりながら、しかも作品から獨立した價値を湛へてゐるやうに思はれる。

コンテクストに忠實であると同時にそれを捨てても生きてゐる章句を含むこと。すぐれた作品とはかういふものであるのかも知れない。ちなみにこの方面での最大の才人はおそらくシエイクスピアである。

右に引用した博士の言葉の中にはけだし永遠の家庭像の一つが表れてゐる。そしてそれは得も言はれぬ喪失の感情と共に提出されてゐる。

かつて自分は理想の家庭で成長し、自ら將來は理想の家庭を作らうと欲し、それが出來ると信じてもゐたが、いざ家庭を持つて見ると、家ぢゆう何處をさがしてもその理想は見つからず、「希望の光」はすつかり消えてしまつた……。

私が「序」の中で手短かに述べたことを想ひ起して頂きたい。文學者は屢々、現存の秩序に虚僞を感じて、かつて存在してゐた眞實の秩序に、或は存在し得たかも知れないそれに思ひを馳せないではゐられないのだ。文學の機能の一つがこれであるとすれば、『半日』のこの箇所は明らかにその機能に則つて書かれてゐる。

『半日』の中にかういふ部分がもつと含まれてゐたら、この作品は美しい喪失の詩になつてゐただらう。いや、現在のままでも喪失の詩たり得てゐるのだが、執筆の現實的な動機が幾分その性格を弱めてゐることは否定出來ない。

しかし動機といふことでは、作者自身それを明確に意識してゐたかどうか判定し難い第三の動機が想定される。そしてそれは前述のやうな喪失の感情に根差してゐるのである。

『半日』には唯一つの家庭しか登場しない。紀尾井町にある奥さんの實家のことも時々、博士と奥さんの會話や獨白の中に織りこまれてはゐるが、それは所詮背景であり、私達にはそれが富裕な上流家庭であること、子供に甘いらしいといふ位のことしかわからない。すなはち『半日』の中の家庭の姿は他の家庭との比較において與へられてゐるわけではないのだが、この作品の特質を明らかにするためには、同時代の一般的な家庭の在り方を朧氣ながらも思ひ浮べる必要があらう。その手懸りになる箇所を『半日』の中に求めるとすれば、それは次のやうな結びの一節である。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

精神の變調でないとすれば、心理上に此女をどう解釋が出來よう。孝といふやうな固まつた概念のある國に、夫に對して姑の事をあんな風に云つて何とも思はぬ女がどうして出來たのか。西洋の思想から見ても、母といふものは神聖なものになつてゐるから、夫に對して姑を侮辱しても好いと思ふ女は先づあるまい。東西の歴史は勿論、小説を見ても、脚本を見ても、おれの妻のやうな女はない。これもあらゆる値踏を踏み代へる今の時代の特有の產物か知らんと、博士はこんな風な事を思つてゐる。(7)

これはここに至るまでの文の流れに乘つて讀めば抵抗なく讀める一節であり、博士のやうな境遇に置かれた人がこれを讀めば溜飲が下るだらうが、よく考へると、ここに書いてあることは必ずしも正確ではない。「西洋の思想から見ても、母といふものは神聖なものになつてゐる」は問題なく正しいとしても、「東西の歴史は勿論、小説を見ても、脚本を見ても、おれの妻のやうな女はない」と斷定することは正しいであらうか。「孝といふやうな固まつた概念のある國に、夫に對して姑の事をあんな風に云つて何とも思はぬ女がどうして出來たのか」といふ一文にしても、一國に「孝といふやうな固まつた概念」があつたところで、その國のすべての女がその「概念」に從つて生活するわけのものではないだらう。嫁が姑を白眼視するといふ程度の話はその氣になつてさがせば見つかるに決つてゐる。

しかし私達は理性が感情に壓倒されがちなこの文から博士の理性の聲を聽き取らなければならない。

博士は妻を例外中の例外だと言つてゐるのであり、それはその妻と共にある家庭を例外中の例外として認めたことに等しい。とすれば博士の家庭を例外たらしめる世間普通の家庭はどんなそれであつたのか。

私は田山花袋の『蒲團』について論じた文の終結部で、明治時代の多くの知識人は頭の中に近代を所有しながら、生活は前近代の中で送つてゐたのではないかといふ意味のことを述べたが、社會を構成するのはもとより知識人だけではなく、明治末期の大半の日本人の家庭は、社會が相當近代化してゐたにもかかはらず、『蒲團』の家庭に見られるやうな、前近代的な樣相を呈してゐたものと推察される。社會が近代であるのに對してその根幹をなす家庭が前近代であることは勿論、一箇の矛盾であるが、文明開化の路線に沿つて生きる人々はその矛盾に氣づかず、相反する二つの要素の均衡がもたらす調和を樂しんでゐたのであらう。しかし鷗外は家庭生活の上でその調和から見放されてゐた。近代の毒がそろそろ生活の中に回り始めた眺めがそこにあるとは言へないだらうか。

引用文の中の、「精神の變調でないとすれば、心理上に此女をどう解釋が出來よう」といふ部分で博士は妻を世の中の何處にもゐない、特殊な、異常な女と見做してゐる。しかし何行か先の、「これもあらゆる値踏を踏み代へる今の時代の特有の產物か知らん」といふ呟きにはこれとは少し違つた含みが忍ばせられてゐるやうに思はれてならない。時代が時代だからおれの妻のやうな女は他にだつてゐるかも知れない、といふのがその含みであり、この食ひ違ひには興味をそそられる。

前者において博士は自分の例外的な家庭を世間の健康な、常識的な家庭に對置させてゐると言へよう。一方、後者では、「あらゆる値踏

NII-Electronic Library Service

Meisei University

を踏み代へる今の時代」といふ批評を軸にして、自分の家庭の毒は他の家庭の毒にもなり得ると考へてゐることになりはしないか。

私は『半日』執筆の動機を二つに分けて、その第一を生活の危機の克服に賭けた冒険としたが、危機といふことでは、作者の中に、その生活の危機は社會の危機になるかも知れないといふ視點が存してゐたやうに思ふ。これは「あらゆる値踏を踏み代へる今の時代」といふ言ひ方からも、鷗外の他の作品の特質からも、ほぼ確實に言へることである。そこで『半日』の第三の動機として、作者は彼の家庭の狀況を敢へて人目に曝すことによつて、さういふ家庭がふえて行くのを少しでも防がうとしたのだと考へたくなるのだが、唯、問題なのは、これが作者によつて何處まで明確に意識された動機だつたのかといふことでなければならない。

清田文武は山田晃といふ人の言説を次のやうに紹介してゐる。

> 山田晃は、（中略）明治天皇が父帝の靈をまつる孝明天皇祭すなわち國家的な「孝」の大禮の日に焦點を當てたことから、この作品を「孝の國の、孝の家庭の、孝の日の、半日の物語にほかならぬ」とし、この半日の「波瀾が、當事者とその家庭の危機たるにとどまらず、時代と社會の危局の豫報たりえていることを指し示した」ものと解釋する。(8)

私にはこの指摘の前半は大いに疑問である。孝明天皇に孝の字が含まれてゐるからといつて、それを孝の德目にこれほど直線的に結びつけなければならないであらうか。勿論、これは鷗外がさういふことを考へてゐたのだらうかといふ意味である。

しかし引用文の後半の部分には傾聽すべきであると思ふ。山田の原文に當つたわけではないので、鷗外が『半日』によつて「時代と社會の危局」を意識的に「豫報」したと彼が考へてゐるのかどうか定かではないけれど。

ことによるとそれは明確な動機ではなかつたのかも知れない。しかし文學作品においては屢々、作者が自覺的動機の裏に潛む動機をいはば嗅ぐやうにしながら書くことが起る。

この問題では、自然主義の作品にはありさうもない社會的責任の意識が『半日』に感じられることを考へ合せてもよいであらう。

研究家はとかく『半日』の周邊にだけ眼を注ぎがちであるが、これを鷗外の他の作品、たとへば『安井夫人』（大正三年）、『ぢいさんばあさん』（大正四年）、『澁江抽斎』（大正五年）などに比べて見ることも出來るのである。鷗外がこれらの作品の中で描いたのは、嫁した家にすべてを捧げることで己が誇りを全うした女達である。『安井夫人』の佐代、『ぢいさんばあさん』のるん、『澁江抽斎』の五百のやうな、獻身と自己犧牲の精神の持主は明治、大正の代にはさすがに少なかつたであらう。いや、封建時代においてすら、さう多くはなかつたに違ひない。とすれば彼女達を造型した鷗外の胸底には、社會に一つの規範を示すことで、その崩壞を及ばずながら食ひ止めたいといふ心理が働いてゐたものと考へられよう。

『半日』とこれらの諸作は一枚の貨幣の表と裏のやうなものである。いづれの場合にも作者は不在の感覺から出發してゐる。

鷗外の處女作である『舞姫』は青春を失つた地點から書かれたところの、歎きの詩であるとはよく言はれることだが、喪失の感情は彼の他の作品をも特徴づけてゐる。やや過褒のきらひはあるかも知れない

NII-Electronic Library Service

Meisei University

が、鷗外はその古めかしい外観にもかかはらず、樂園から追放された近代人として生きたのではなかつたかといふ氣がする。「(私が)此家に來たのは、あなたの妻になりに來たので、あの人の子になりに來たのではない」(9)といふ奥さんの科白を誰もが當然視するやうになつた時、『半日』は作品としての生命を終へるであらう。そしてそれは『安井夫人』『ぢいさんばあさん』『澁江抽斎』等の名作が顧みられなくなる時でもあらう。

付記　右は長い論文の一部として構想したものであり、従つて未完である。筆者のもくろみとしては、現代に至るまでの様々の作品を取上げようと考へてゐる。

註

註は章別につけることにする。

一

1 『東京の三十年』　定本花袋全集・第十五巻（内外書籍・昭和十二年・初版　臨川書店・平成六年・復刻版）　五九九―六〇一ページ
2 『蒲團』田山花袋集（筑摩書房・現代日本文學全集9　昭和三十年）　三十二ページ
3 『蒲團』　三十三ページ
4 『田山花袋論』　中村光夫全集・第三巻（筑摩書房　昭和四十七年）　二七七ページ
5 『早稲田文學』明治四十年十月『蒲團』合評・所収　近代文学評論大系・第三巻（角川書店　昭和四十七年）　四二七ページ
6 『蒲團』　三十一ページ
7 『早稲田文學』『蒲團』合評　四二二ページ
8 『東京の三十年』　六〇一ページ
9 『早稲田文學』『蒲團』合評　四二九ページ
10 同右　四三一ページ（署名は「星月夜」）
11 『蒲團』　三十四ページ
12 同右　四十七ページ
13 同右　三十九ページ
14 同右　四十八ページ
15 同右　三十四ページ

二

1 『半日』　森鷗外集（筑摩書房・現代日本文學全集7　昭和二十八年）　三十ページ
2 『父親としての森鷗外』（大雅書店　昭和三十年）　一四七ページ
3 『森鷗外――基層的論究』（八木書店　平成元年）　一八八ページ
4 同右　一九四ページ
5 同右　一九〇ページ
6 『半日』　二十九ページ
7 同右　三十二ページ
8 『鷗外文芸の研究　中年期篇』（有精堂出版　一九九一年）
尚、山田晃の文は『「半日」閑話』（『古典と現代』46　昭和五十三年）に収録されてゐるとのことである。
9 『半日』　二十四ページ

NII-Electronic Library Service